



Title	テレビインタビューにおけるframe 分析
Author(s)	高木, 佐知子
Citation	大阪大学言語文化学. 1996, 5, p. 121-133
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テレビインタビューにおける frame 分析*

高木佐知子**

The concept of frame developed and presented by Bateson and later by Goffman shows us a way of understanding meaning in conversational interaction. Bateson(1972) remarks that to apply a frame is to convey and understand “metacommunicative level” of messages. In other words, applying a certain frame to a conversational move is to interpret what is going on, not only literally and by following grammatical rules, but also on the basis of the speaker’s intention and of his/her relations with the listener.

The purpose of this paper is to point out changes in frames (henceforth, frame shifts) in English TV interviews by analyzing their linguistic, para-linguistic, and non-linguistic features and to clarify the roles these frame shifts play in the interaction.

This paper also analyzes the participants’ footings. The concept of footing is described by Goffman(1981) as “alignment of speakers in conversation,” which means the temporary and psychological positions they take during the interaction. Therefore, by examining the changes in footings which relate to frames in conversation, this paper tries to interpret frame shifts with more interactive point of view.

By videotaping and transcribing 14 interviews of the TV talk show “Larry King Live,” broadcast by CNN, 2 levels of frame shifts have been noticed; one is intraframe shift and the other is interframe shift. An intraframe shift is a change which occurs inside the mainstream frame (the interview frame, in this paper), and an interframe shift is the one which deviates from the in-

*An Analysis of Frames and their Shifts in TV Interviews (Sachiko TAKAGI)

**言語文化研究科博士後期課程

interview frame. The analysis shows that these shifts, which are dynamic movements led by the participants' footing shifts, create new frames conveying various kinds of "metacommunicative level" of messages. It also demonstrates that these footing shifts and frame shifts function as one of discourse strategies to meet the viewers' expectations.

1 はじめに

frame という概念は、文化人類学や社会学の分野では、Bateson、Goffman、そして Gumperz などにより考察が行われているが、それは、ある行為の枠づけを行うものであり、その行為が参加者の意図や互いの関係を含めて解釈されるための道具立てであるとされている。そして、社会行為である会話に関して、Bateson(1972) は、frame は metacommunicative レベルのメッセージを示すものであるとしている¹⁾。つまり、会話における frame は、実際に進行している言語、非言語行為に関して、話者の意図や彼らの相互関係に基づいた解釈を示しているものであるといえる。すなわち、話者の意図や彼らの関係も考慮に入れた上で、frame によって「何が起きているのか」についてのメッセージが提示されているのである。

本論文では、この frame の概念を用いており、frame および、その変化（以下、frame shift とする）がどのような言語現象、非言語現象として、テレビインタビューという一種の会話の中で捉えられるか、そして、特にこれらの frame shift が、コミュニケーションの中でいかなる役割を果たしているかについて考察することを目的とする。

さらに、本研究では、frame shift の分析にあたり、話者の footing の変化（以下、footing shift とする）というものを捉えている。footing は、会話において話者がとる位置づけである（Goffman(1981)）。すなわち、footing は、frame を規定している当事者たちの相互の関係づけであり、実際の社会的立場というよりは、時にはインタビュアーとゲストであり、時には友人どうしである、というように、会話の進行とともに変化する彼らの心理的立場なのである。frame を作り

¹Bateson(1972)における metacommunicative レベルとは、ディスコースの主題として話者どうしの関係を表わすものである。例えば、相手の捜し物の在りかを伝えることにより相手との友好的関係を示すようなコミュニケーションがそれにあたるとされている。

出す話者たちが互いに対してとっている立場を考慮することにより、その frame がどのような性質のものであるかをより明確に把握できると考えている。

2 先行研究、および、本研究の意義について

会話における frame を分析し、その metacommunicative レベルのメッセージを明確化している主な先行研究としては、Tannen(ed.)(1993)がある。その中の各論文は、主として、各々の frame の分析が中心であり、会話の流れにおけるこれらの frame の shift の過程については、深くは考察されていない。ただ、その中でも、Hoyle(1993)は、footing を考慮することによって、frame shift の分析を行っている。しかし、この場合、小学生 2 人の会話が唯一のデータであるため、その研究から一般の大人の footing と frame の変化に関する考察を導くことは少々無理があると考えられる。

したがって、テレビインタビューという同一の状況において、種々の社会的立場を持つ複数の話者の談話を分析することは、ある程度一般化された言語使用の実態を捉えることであるといえるので、本研究は、footing を考慮した上述の Hoyle の場合よりも、さらに包括的な考察を提示することになる。そして、常に footing shift との関連で frame shift を分析することにより、Tannen(ed.)(1993)よりも話者間の立場を動的に捉えた frame 分析が可能になっていると考えられる。

frame の概念をテレビインタビューに適用する意義として、さらに、話者のストラテジーという観点を分析に付加できることが挙げられる。日常会話では、われわれは、相手の言葉や表情、その場の状況などから、提示されている発話がどのような metacommunicative な意味を持っているのかを判断しながらそれに応じ、コミュニケーションを進めている。つまり、どのような frame が今進行中であるかを互いに理解し合って、スムーズな会話を行っているのである。一方、テレビインタビューにおいては、インタビュアーもゲストも視聴者を意識しながら会話を行う。インタビュアーに対しては、観る側の興味が満足されるような質問を行ってもらいたい、また、ゲストに対しては今まで知られていなかった面を出してほしいという期待が視聴者からあり、両者ともにその期待を意識していると考えられる。そして、視聴者の期待に対する意識を持ちながら、両者が会話を行うことになる。したがって、話者によって作り上げられる frame の変化にもその意識が反映されるであろうから、このような frame を分析することによって、視

聴者の期待を意識した話者たちの会話ストラテジーについても言及できると考える。このように、会話ストラテジーとしての frame に注目している研究は、先行研究の中にはまだ見当たらないので、本研究は、この点に関しても意義があると考えている。

3 テレビインタビューのデータに関して

本考察では、CNN 放送による“Larry King Live”という英語の対談番組を録画し文字化したものを分析した²⁾。インタビューは 14 種類、総時間は約 8 時間であった。パラ言語的、非言語的要因については、できる限りルール化して、トランスクリプションに取り込んだが、頻度の少ないものに関しては、それらの行為自体を記述している³⁾。分析にあたり、英語の母国語話者にも録画したデータを見てもらい、その解釈についての同意を得ることができた。

4 分析結果および考察

本データにおいて中心となっているのは、インタビュー frame である⁴⁾。さらに、インタビュー frame を維持しながらも別の frame が作り出されたり、また、インタビュー frame から別の frame へと移行する場合も観察された。これらの変化を、それぞれ、intraframe shift、interframe shift と名づけて考察を行った⁵⁾。

²英語のデータを使用した理由は 2 つある。第 1 の理由は、先行研究、特に Hoyle(1993)と立場は類似しているものの、それらを発展させ、さらに一般的な frame shift と footing shift の考察の提示をするために、同じアメリカ英語のデータを用いたのである。第 2 の理由は、英語のデータで、相手と自分の立場を考慮する footing shift における言語的变化を考察することは、英語における待遇表現を考える上で示唆的なものとなると考えたからである。英語には、日本語のように確立した敬語体系がないために、その待遇表現研究の枠組みについて、今後さらなる研究が必要とされると言われている（井出 (1982)）。

³話されたそれぞれの単語の記述、および、パラ言語的、非言語的要因の記述に関しては、英語の実際の会話を記述、分析している Tannen(1984)を参照した。さらに、この中に含まれていないが頻出する行為については、筆者がその記述法を追加した。このようにして、実際の会話行為をルール化して紙面に再現することにより、先行および後続の行為と関連しながら進む会話の流れを把握することができた。

⁴話者が、相手に関する、前もって決められた質問を行い、その相手がそれに答えるという関係からみて、現在起こっているのはインタビューであるといえる。ここでのインタビュー frame は、インタビュアーが会話の流れのイニシアティブをとる、インタビュートピックの内容にそって話が進むという 2 つの特徴をもっている。

ただデータの中では、frame shift の起こらない部分もあり、それは、ゲストにより異なるが、時間的には全体の 50% から 70% ほどであった。そして shift が起こってもあとは、常に、shift の前のインタビュー frame に戻っていくのであった。

後述の frame shift の例と対比するために、ここで、まず、frame shift のない場合の具体例を考察することにする。(1)は、米大統領特別顧問の Cutler 氏がインタビュアーの Larry と話している部分である⁶⁾。

(1) L: Does that mean you can not discuss Paula Jones with him?

C: Oh, I can discuss Paula Jones with him but he cannot place any confidences in me, and we cannot use government funds, our funds to defend him. He needs a private lawyer.

L: But you can give him your legal expertise?

C: I can give him legal advice, I can talk with his private lawyer when he needs to confide. He confides in his private lawyer and he has a good private lawyer.

この会話は、当時、Paula Jones という女性が、アーカンソー州知事時代の Clinton 大統領からセクシャルハラスメントを受けたと公表した事実に関するものであり、ここでの“he”というのは Clinton 大統領を指す。この事件について、大統領特別顧問は関与しないのかという Larry の質問に、Cutler 氏は、実際はそれは大統領の“private lawyer”が行うと答え、次の、確認のための、より具体的な質問（“But you can give him your legal expertise?”）に対しても、Cutler 氏は同様に答えている。このように、Larry は、Cutler 氏がある質問に答えても、視聴者がさらに理解しやすいように、言葉を変え、具体的な内容を折り込んで質問を重ねているのである。

この部分ではインタビュアーとゲストという位置づけからの footing shift は見られない。そして、インタビュー frame の枠内で他の frame が作り出されることもなく、インタビュー frame が他のものに変化することもない。言語的には、法律家である Cutler 氏との、仕事に関するやりとりということもあり、両者とも

⁶⁾1994 年 5 月 18 日放送 ゲスト Lloyd Cutler (大統領特別顧問)

に、“legal expertise”や“confides in”のような固い語彙を用いているのが特徴的である。

4.1 intraframe shift

インタビュー frame は継続中であるが、その枠内において別の frame が作り出される場合の変化が intraframe shift である。このように継続中の frame の内部で、さらに別の frame の進行が見られるというのは frame の研究においては、今まで注目されなかった点であるが、本研究では、しばしば認められる現象であった。

4.1.1 相手をより身近な存在として捉える intraframe shift

(1)と同じデータである大統領特別顧問の Cutler 氏との会話において、以下のような intraframe shift が認められた。

(2) L: If the president says “Stay past September,” might you?

C: I might stay a while. I can't, I won't stay long. I have, I have had this job before. I know how wearing it is and how old I am and as I said the day I was first introduced, I have a young and peppy wife and I want to spend more time with her. ((smiling))

L: ((a little laughing))

(下線の部分が shift の起こっている箇所である。以下の例においても同様である。)

この部分は Cutler 氏の職務期間について Larry が尋ねている箇所である。Cutler 氏は早く職責から解放されたい理由として、仕事の内容や自分の年齢という一般的な事項を挙げているが、その次に、プライベートな内容に言及している。そして、この、“as I said...”以下の下線の発話で、intraframe shift が起こっている。つまり、Cutler 氏が、“as I said...”以下の発言によって、それまでの法律の専門家対インタビュアーという footing を一般の男性 (Cutler 氏) 対その身近な人 (Larry) へと変化させることにより、一種の打ち明け話の frame を作り出しているのである。言語的には、「若い妻云々」というユーモラスな内容、“peppy”と

いう俗語による強調表現（これは、例(1)の固い語彙と対照的である）、さらに、非言語的には、それまでは真面目な顔をして話していた Cutler 氏のここでの突然の笑顔が、彼の footing shift、そして frame shift を示している。さらに、この footing shift、そして frame shift は、GESTO として Larry と視聴者を意識した、Cutler 氏の会話ストラテジーにもなっている。つまり、大統領特別顧問の発言として Larry や視聴者が予想するのは通常、固い仕事内容や高尚な見解などであるが、このような通俗的な発言により、Cutler 氏は Larry や視聴者の予想を裏切ることによって、逆に大いに氏に対する彼らの興味を引きつけることとなったのである。

この Cutler 氏のストラテジーが見事に成功していることが、彼の発言にオーバーラップしている Larry の笑いによって表わされている。この場合、笑いという非言語行為によって、Larry 自身の footing shift と frame shift が表わされている。つまり、Cutler 氏の身近な人という footing をとって、打ち明け話の frame において彼の話に大いに興味を示したことを Larry の笑いは表しているのである。さらに、Larry は、視聴者とともに Cutler 氏の発言を聞いているのであるから、彼の笑いは、彼のものだけではなく、予想を裏切られた視聴者の、驚きを表わす笑いでもあると考えられる。このように、視聴者の気持ちを代弁することにより、彼らの Larry に対する共感を高めるという意味において、彼の笑いは、視聴者に対するストラテジーとしても機能しているといえる。

4.1.2 相手への配慮を示す intraframe shift

本データの中で、intraframe shift の総数は 69 だが、相手への配慮を示す intraframe shift は、その中で 2 箇所しか認められず、両方とも Hillary Clinton とのインタビューで起こっている。（他は全て 4.1.1 の shift であった。）次の例は、彼女が泣きながらスピーチを行っている映像が写し出された直後の Larry の質問である⁷⁾。

(3) L: What caused you to show that, which we had not seen in you before?

H: Well, it was such an extraordinary experience yesterday morning.

⁷⁾1994 年 5 月 6 日放送 ゲスト Hillary Rodham Clinton（合衆国ファーストレディ）

この番組では、Hillary Clinton とのインタビューでさえも、Larry は概して直接的な言い方で相手から話を引き出そうとしている。しかし、例(3)の部分では、Larry は Hillary に対して、なぜ泣いているのかという尋ね方はしていない。公のスピーチでファーストレディの彼女が涙を流すのはかなり特別な理由があるに違いないと予期しながら、Hillary の立場を考慮して、このような婉曲表現（特に“which we had not seen in you before”の部分）を用いたのだと考えられる。視聴者にしても、こういう場合には、相手にあれこれ聞くのは失礼ではあると思う一方で、聞いてみたいという要望もあるだろうから、Larry はこれをも意識して敢えて質問したのだと考えられる。ここでは、Larry は、このような婉曲表現により、First Lady という Hillary の社会的地位を意識して、彼女に、高い社会的地位を持つ人という footing をあてはめ、自らの footing は、彼女に敬意を払う一般庶民の立場へと移動させている。そして、「今は、あなたへの配慮を示しているのですよ」という metacommunicative レベルのメッセージを送る、相手への気遣いの frame が作り出されている。Hillary も“it was such an extraordinary experience”という客観的表現で答え、Larry の frame を理解し、自分の感情をすぐに吐露することなく、公の立場としての footing をとっている。このように、この intraframe shift においては、インタビュー frame の中で相手に配慮が示され、それが受け入れられているのである。また、同時に、Larry の footing shift と frame shift は、ゲストの感情を害することなく視聴者の要望を満たすことができる、戦略性となっているのである。

4.2 Interframe Shift

インタビュー frame から別の frame へと変化すること、つまり、インタビュー frame からの逸脱が、interframe shift である。この場合、インタビュアーによる、相手から聞き出すという行為、および、ゲストによる、相手に答えるという行為がいったん中止され、他の行為が始まっている。

4.2.1 インタビューについての言及を行う interframe shift

これは、インタビュー frame を中止して、インタビューそのものについて言及を行う shift である。つまり、ゲストに対して質問をするのではなく、インタビュー番組を作り上げている 2 人の人間という footing を両者がとり、そのインタビュー

- (5) F: You learn from other actors. { You learn to –
 L: } We only have a minute. Why do
} *fast*
 you like being other people?
 F: (1.0) Uh – oh my. You mean acting other people?
softly
 L: Yes.
 F: ((laughing))
 L: Hello. Going into one of your transformations and being other
people. Yeah, acting.
 F: Well, because I get paid for it, and because it's uh- expression.

これは Larry の言った“other people”というキーワードを、芝居というコンテクストから切り離して日常レベルのコンテクストで考えてしまった Farrah が混乱を起こした場面である。彼女の「他の人になるというのは、他の人を演じるということよね」という発言でその混乱が表わされている。画面では、Farrah の自信がなく弱々しい声、胸に落ちない様子を表わすトーンや顔の表情が彼女の誤解を示している。Larry はとっさにコメディアン的 footing をとっている。つまり、相棒のとはけた発言をさらに発展させて視聴者から笑いを引き出すテクニックを用いることにより、この footing shift が実現しているのである。この Larry の“Hello.”は反応が遅れたり、ぼんやりとしている人に対して、注意を促す表現であるが、相手をからかう意味があるので目下の人や親しい仲間に対して使用されるものである。この“Hello.”により、Larry によるからかいの frame が始まっていることがわかる。つまり、「何をぼんやりしているのですか。あなたが変身をして、他の人になるということがわかりますか。」と、彼女の反応の遅れを冗談気味に強調している。ここで進行しているのは、インタビュー frame ではなく、Larry が Farrah の反応について、彼女自身をからかっているからかいの frame であり、この frame において、「何を混乱しているのですか」という metacommunicative メッセージを送っているのである。このように、ゲストをやんわりとからかいながら話を進めるということは、この場合、ふだんの演技では知ることのできない女優のある一面を強調することになり、ゲストに失礼にならずに視聴者の興味を増加させるための有効な戦略之一となっている。

5 まとめ

テレビインタビューにおいては、インタビュアーの質問にゲストが答えながら会話が発展していくことが前提であり、インタビュー frame は、その前提が満たされている場合に存在する。しかし本考察により、インタビュー frame は固定したものではなく、その内外で、種々の frame のダイナミックな動きが認められた。例えば、女優の Farrah Fawcett とのインタビューは約 30 分の間に、frame shift が以下のように計 11 回行われた。

(相手をより身近な存在として捉える intraframe shift を“intra/身”、インタビューへの言及を行う interframe shift を“inter/イ”、また、個人的な言及を行う interframe shift を“inter/個”と記述する。数字はインタビュー開始後の経過時間(分)を示す。)

(1 分)	→	(1 分)	→	(4 分)	→	(4 分)	→
intra/身		inter/個		inter/個		inter/個	
(6 分)	→	(11 分)	→	(15 分)	→	(16 分)	→
inter/個		intra/身		inter/個		intra/身	
(20 分)	→	(24 分)	→	(24 分)			
intra/身		inter/イ		inter/個			

話者たちは、種々の frame shift により、話を発展させたり、相手をからかったりしながら会話を生き生きと進めていることが明らかにされた。これらの frame shift は、言語上の冗談や誇張、また、笑いやジェスチャーなどにより示されていたのだが、それらは前後の会話行為を考慮した談話レベルでデータを捉えることで理解できたものであった⁹⁾。

また、これらの frame が、自然に存在し、変化していくものではなく、種々の footing をとる話者によって作り出され、その footing shift によって変化するものである、相互作用的で動的なものであることも確認した。

さらに、インタビュー番組という特殊な会話において、話者たちが、その視聴者の期待に応えるための、ストラテジーの一種としても footing shift と frame shift

⁹本文では詳述できなかったが、frame shift を起こす言語行為として、強意的な語彙による誇張や疑問文などによる感情表示、また、バラ言語、非言語行為としては、特殊なイントネーション、笑い、ジェスチャーなどによる感情や意味の付加が認められた。

が機能していた事実を認めることができた。このように、会話ストラテジーという点においても、frame と footing の洞察は意義深いものであった。

今後、さらに多くの種類のデータを分析することにより、frame shift に関わる言語、非言語行為の分析を充実させること、そして、frame shift に影響を与える社会的要因、文化的要因についても考察を進めることを考えている。なぜなら、このような metacommunicative レベルの解釈を意識することにより、われわれがコミュニケーションにおいて、文法や語法を越え、相手との関係において意味を伝達し、理解する、そのメカニズムに迫ることができると信じるからである。

トランスクリプション表記（一部）

((smiling))	非言語行為を表わす
(1.0)	ポーズを表わす（1秒単位）
<i>softly / fast</i>	その発話が弱々しく／速い速度でなされたことを示す
-	その直前の語で発話がとぎれたことを示す
[	発話がオーバーラップしていることを示す

主要参考文献

- Bateson, Gregory. 1972. *Steps to an Ecology of Mind*. New York: Ballantine Books.
- Goffman, Erving. 1974. *Frame Analysis*. New York: Harper & Row.
- Goffman, Erving. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gumperz, John. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah. 1984. *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*. Norwood, NJ: Ablex.
- Tannen, Deborah. (ed.) 1993. *Framing in Discourse*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- 井出祥子 1982. 「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 5 文化と社会』pp.107-150 大修館書店
- 津田 葵 1989. 「社会言語学」柴谷方良・大津由紀夫・津田 葵『英語学の関

連分野』（英語学体系6） 東京：大修館 pp.365-495

三牧陽子 1993. 「談話の展開標識としての待遇レベルシフト」『大阪教育大学
紀要』42-1 pp.39-51 大阪教育大学